



視点を変えれば 防災も変わる

女性だから気付くこと

視点を変えることで、これまで気付かなかった課題が見えてくる。さまざまなニーズに対応しようと「多様な視点」や「先進技術」を真にする防災の取り組みが進められていることを知っているだろうか。

▼大切な人を守るために

着替えや授乳の場所がない、女性や赤ちゃんの必需品がない、トイレの数が足りない!。そんな女性の声¹が被災地で上がった。近年、その多様なニーズに応える取り組みの重要性が高まっている。そこで求められているのが「女性の視点」。女性だからこそ気付くべきやすい課題がある。例えば、水、電気

ガスに限られた状況で、栄養バランスなど健康に配慮した「食」をどう確保するかもその一つだ。

「ビニール袋を使ってご飯を炊くことができるんですよ」と話すのは、「なでしこ防災ネット」の代表を務める吉田トシ子さん(67歳・沼代新町)。地域や家庭で担う女性の役割が大きい一方で、地域の防災に女性の視点が欠けているのに気付いたことが、活動のきっかけとなった。

「災害が起きたとき、男性が近くにいるとは限りませんよね。女性が大切な人を守るためには、女性ならではのきめ細やかな視点で防災を考えることが大切です」。その思いから、日頃の備えと工夫についてまとめたリーフレット「女性の視点からの防災対策」や非常食のアレンジレシピ集「もしもの時の非常食」を作成。地震発生直後はもちろん、救援物資も届き徐々に復興に向けた活動が始まる中、長期化する避難生活にも目を向けた。「限られた食材でも、元気が出るよう工夫しました。ビニール袋を使った炊飯はキャンプにも応用できるし、普段も活用してほしい」。

▼秦野の湧水を生かして

吉田さんは、「水」にも注目した。災害時は飲料水、トイレや洗濯などの生活用水をどう確保するかが大きな課題となる。豊富な湧水に恵まれ、井戸も多い秦野の特性を生かせないかと考えた吉田さんは、自宅の井戸

や湧水を近所に開放してくれる「災害時協力井戸」を調査。その場所が一目で分かるマップを作成した。

「水道の復旧は電気よりも時間がかかるので大変。近くの井戸の場所を把握してほしいですね」

▼できることを普段から

市民の日やスーパーなどで活動をPRしてきたが、より多くの人に広めることが今後の課題の一つだと話す吉田さん。そういった点でも、女性の影響力は大きいという。

「女性が学んだ防災知識は、家庭はもちろん、近所付き合いで地域にも広がっていくんです。できることから取り組んでみてほしい」

水や食材に限られた中での調理法や近所の井戸の場所を知っていたらどうか。紹介したリーフレットやマップは市の防災課やなでしこ防災ネットのホームページ(<https://hadano.aheadshikobousai.jimdo.com/>)で手に入る。家族で普段から活用してもらいたい。



1 「なでしこ防災ネット」代表で防災士の吉田さん。平成17年に仲間と活動を始める「サバイバルDayキャンプ」の開催など多様な活動を行う。市内に108件ある「災害時協力井戸」はこの看板が目印

乳幼児向け「乾パン」のミルク煮。水でふやかした乾パンに、湯で溶かした粉ミルクを入れて完成

